

保存科学研究集会の開催

保存修復科学研究所では、保存科学分野に関する意見交換や幅広い情報交換をおこなう場として保存科学研究集会を開催しています。今年度は、去る2月5日（土）に奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において「古代の玉－最新の保存科学的研究の動向－」と題して研究集会を開催し、全国から97名の方々にご参加いただきました。

今年度の保存科学研究集会は古代の玉製品を主題として取り上げ、ガラス製玉類をはじめ、石製、あるいは琥珀製の玉類などを対象に8件の講演がおこなわれ、製作技法や材質に関する最新の研究から、年代や生産地に関する様々な新しい情報が提示されました。とくにガラス製の玉類に関してはインドや東南アジア、さらにイスラム、ローマなどに起源をもつものが、陸や海の交易ルートを経由して韓国や日本に伝えられたことが明らかとなってきました。もはや日本国内だけの技術の伝播や流通にとどまらず、広く世界的な視野も必要となってきたようです。総合討議では产地や流通などの議論に加えて、分析法やデータ解釈に関する問題についても活発な議論がおこなわれました。

ポスター発表では玉製品に限らず、広く保存科学に関する話題について取り上げ、鉄製品や遺構の保存などに関する6件の報告がありました。ポスターを前に、様々な話題が飛び交い、お互いが抱える保存科学分野の多くの問題が語り合われました。今後も様々なテーマで保存科学研究集会を開催していくことで、保存科学分野の発展につながっていくことを期待しています。

（埋蔵文化財センター 田村 朋美）



退職者のひとこと

奈良文化財研究所にお世話になって通算38年が経ち、いよいよ退職の時が訪れました。この間様々な発掘にかかわることができました。20代後半にはマルコ山古墳、考古学ではおそらく初めてファイバースコープで石室の中を観察したことで話題になりました。しかし、実際の撮影はズボンのベルトと脚を持ってもらい、盗掘孔から宙づり状態でファイバースコープを私が手に持ち、外でモニタを見ている先生方の言うがままに方向を変えたりしました。今から思うとずいぶん滑稽な話です。30～40代では特に山田寺の発掘に印象深いものがあります。おびただしい数の部材が散乱、瓦が葺かれたままの状態で倒壊した回廊など、強烈な印象を受けました。ほかにも水落遺跡の貼石遺構と特異な地中梁もかなりインパクトがありました。50代になってからはキトラ古墳、高槻市の闘鶏山古墳、高松塚古墳の撮影などで機材の開発や撮影方法等を考えたりと、やりがいのある仕事ができました。様々な発掘が思い出されますが、なぜか長年藤原調査部にいながら藤原宮の印象が薄いような気がします。また、飛鳥資料館特展のためのポスター写真は30年以上に渡り自由に撮影できたこと等、本当に楽しく仕事ができました。38年の間に写真もすっかり様変わり。40代中頃からはデジタルとのつきあいが始まり、今ではデジタルなしには仕事ができなくなっています。銀塩さえ知っていれば仕事が成り立っていたのに…。おかげで頭は少し活性化できたことと、他では触ることのできないような最先端のデジタル機器を扱うことができたことです。思い返せばあっという間の38年間。長い間お世話になりました。

（企画調整部 井上 直夫）



気分は未だ40代